

日本語が娘に与えてくれたもの

上久保 恵美子

「今日は七夕。星に願いをかける日ね。」と十一歳の娘が、折り紙を短冊に仕立てて見せに来た。「馬おのりがとくいと宇宙へんきよ星のせ座おみるおとくいなすおり。」

涙が出た。もし、これがスウェーデン語で書かれていて、これだけの誤りを含んでいるとしたら、スウェーデン人に——たとえ父親であっても、娘の願いは理解されるだろうか。

重度の言語障害と記憶困難を抱えた娘は、小学校では、言葉を使うほとんどの科目についていけない。診断や教育計画の面談のたびに、家庭での言語環境が話題となる。「スウェーデン人の父親とはスウェーデン語で、日本人の母親とは日本語で会話。父母間では英語も併用される。」次に、どうしてこんなにスウェーデン語が伸びないのか、が問題とされる。スウェーデン語のシャワーが少なすぎるに違いない、ということ、もっと話をするように」という注意が父親に出される。「子どもたちが騒いでいたらね、『黙れ』と怒鳴りつけないです。そして『スウェーデン語で話しかけたぞ』と私に向かって言い切った人なんですよ。」と話すと、たいていはどこでも笑いがとれた。笑いがおさまると、必ず「日本語の方はどうなの。」と続く。日本語は比較的ましで、日常生活では、私との間ではたいした問題はおきない、と伝えると驚かれる。日本語を聴解できる者がその場にはいないのだから、日本語の運用力の判断としては客観性に欠けるが、実際に、娘と私の日本語でのやりとりを見る先生たちは、娘が会話の内容を理解しているらしいことを見てとる。そして、「母語」の強さなのか、「日本語」の強さなのか、に話題が向かう。

「修飾・被修飾の順関係に例外はなく、疑問文に語順移動がない、など、とても規則的だが、基本から外れた語順にも寛容。時制は過去と非過去しかない。音素が少ない。音節文字だから文字数は多いが、ひらがなを音読すれば意味が分かる。」など、スウェーデン語と比較しての日本語の特徴を語ると、きまつて、日本語は簡単なのねと感心される。しかし、言語障害の娘でさえなんとか使えるのは、日本語が言語として易しいからだ、と言いつけるだろうか。

ある日、「日本語の温かさ」が一因ではないか、と私見を述べたら、先生たちが不思議な顔をした。つたないスウェーデン語が通じなかったか、と慌てていろいろと言ひ換える私を遮り、夫が流暢なスウェーデン語で訳してくれた。「日本人は、相手の言わんとすることを想像しながら話を聞く、ようです」。私の考えることを、なんとの確に想像し、適切な言葉にしてくれたのだろう。

スウェーデン人の会話では、話し手の言いたいことが分からないと、聞き手は「何と言った」と尋ねる。すると、話し手は、直前に話していた言葉をそっくりそのまま言う。これは何度でも繰り返される。幾度も聞き返したら悪いよね、笑ってごまかしちゃおうか、と私ならためらうところだが、スウェーデン人たちは辛抱強い。何度でも自分が分かるまでは聞き返すし、相手が分かるまでは同じことを繰り返して言う。聞き手が内容を理解できていないと察した時点で、易しく言い換えたり、別の例えを使ったりする日本人の会話とは異なる。分からないのは相手のせい、という考えなのだろうか。

スウェーデン語は、無責任で思いやりが足りない冷たい言葉だ、とまではさすがに思わないが、言葉の使用に重い困難を抱える子どもにとっては、ハードルが高い言葉かもしれ

ない。言いたいことを伝えられなかった失敗体験を繰り返せば、誰だってその言葉を口にすることに臆病になるだろう。伝えようとする意欲が削がれてしまうかもしれない。使わなければ、言葉を上手く使えるようにはならないし、いつまでたっても自信はつかない。ますます口は重くなる。悪循環である。

四歳児の大半が、娘以上にスウェーデン語を操ることができる。これは十一歳の娘にとっても母親の私にとっても大変厳しい現実である。思考するための言葉を十分に獲得できていないせいで、娘の抽象的思考力は非常に弱く、表現はとても幼い。口数も多くない。しかし、だからといって、娘が何も考えてこなかったわけではなく、まして、何も感じていなかったはずはないのだ。同年代の子はおろか、寛容に対応できるであろう大人にも、真摯にスウェーデン語で話を聞いてもらえることの少なかつた娘にとって、言葉を使うということはどれほどの重荷だったのだろうか。

「伝えることに自信がないんじゃないか。」と、毎夏、姪に会うたびに兄が言っていた。障害を認めたくない親族の自衛の言葉、と聞き流してきたが、実は、的を射っていたのかもしれない、と今は思えるようになった。

最近、言葉の上達度とは無関係に、思春期が娘にもやってきた。突然、「うるさいな」「もう嫌」といった反抗的な日本語が出るようになった。同時に、「欲しいな」「やってもいいかな」などと思いを日本語で表明するようにもなった。そして、娘はかなり変わった。自分から、日本の祖父母や私の友人に電話をしようとするのだ。

「相手の言わんとすることを想像しながら話を聞く」日本語の場合、語彙が極端に少なく、用法が間違っていて、娘の言いたいことを聞き手が想像しながら聞いてくれるから、結果として娘は分かってもらえるのである。あるいは、こういうことなのかなと、促しを入れながら聞いてくれるから、娘も「言い方」を覚えるのである。次第に日本語が分かって使えるようになっていく。ついでに自信もついてくる。こういうのは、一度弾みがつくという方向に進む。娘の場合、日本語への自信が、自分自身に対する自信にもつながったようだ。話が一度で通じないとすぐに「ママに聞いて。」と逃げていた娘が、近頃は、言葉を換えながら一所懸命にスウェーデン語でも話そうとしている。それを、父親が辛抱強く聞いている。なんて素敵な光景だろう。

人と人とのコミュニケーションは、直接的には、たいてい音声や文字といった言葉が使われる。しかし、その根底にあるのは、耳には聞こえない、目にも見えない「伝えたい気持ち」である。日本語は、話し手の伝えたい気持ちを大切に作る、そして、聞き手を思いやって分かりやすく心をかける、そういう相手を尊重する相互の思いやりによってなる、温かい言葉ではないだろうか。日本語と、日本語を通して接する聞き手たちが示してくれる「思いやり」が、娘に自信を与えてくれたのだ。さらに、それは、「娘の障害」の重さに心を閉ざしていた私に、兄の思いやりを気づかせてくれたのだ。スウェーデンに住んで、日本語と比較できる外国語・習慣を知り、そして、娘の言語障害に向き合わざるを得ない状況の中で、日本語の素晴らしさを実感した。

娘は、これからもずっと、他人よりもゆっくりと成長していくだろう。その過程でいつか、聞き手の思いやりに気づくかもしれない。その時は是非、自分が大切にされてきたことを感謝し、聞き手を思いやって言葉を選べるようになってほしい。そして、お互いを尊重することの素晴らしさを知って、日本語を大事にしていってくれたら、と心から願う。

「馬にのるのがとくに、宇宙の勉強（星座を見ること）がとくにになりますように。」  
織姫も彦星も日本語ができるだろうから、お願いは叶うはず。一緒に頑張ろう！